



中村俊定文庫  
文庫 18  
405  
2





李撰文選卷之二目錄

- |      |        |         |        |             |                   |     |     |       |
|------|--------|---------|--------|-------------|-------------------|-----|-----|-------|
| 九    | 八      | 七       | 六      | 五           | 四                 | 三   | 二   | 一     |
| 田冠，每 | 希尔二虫，編 | 与，交梅子，文 | 送桃溪子，序 | 了，其，赴，川，越，詩 | 送，去，味，蘇，之，之，芳，野，序 | 吹，箴 | 屏風賦 | 移，石，碑 |
| 桃溪   | 交梅     | 与       | 去味     | 交梅          | 去味                | 交梅  | 桃溪  | 去味    |





- 十 求二品<sub>ラ</sub>辞 六味
- 十一 改中<sub>ノ</sub>解 桃溪
- 十二 不成然日<sub>ノ</sub>海 支櫻



李撰文選卷之二



一 移飛辞

六味

今ハ昔柳梅棠といふある詩乳山の林藤竹といふある  
 かりとの本とよすがごとくして草をける花と結ひ物く  
 人るれ是味気志を志のうよかを春んとせしこみり  
 ありたはるのうみせとるるとも果さるは病目よ  
 せまりはる世の業もかいやり捨て葉餅のにおね  
 しむさすれは宮たあれ柳の糸とるを知らず葉中の  
 不おのつらふもあつてそれもおかしては生もつら  
 うよふ色甘及んら飲りて時ぬするは去蹟例可



三本三巻 卷二 三〇二  
こひあひて困と飲するはるりやう法を避け湯ふ  
うつらさよと暮しのりこめんとせらよすめゆるよ  
誠や孟子の指し氣と後すとうのぬい迷は後居  
せんよこら味して仲のな末つさけ邸は身とま  
るにともり子とこひ孫とこひ親くおむりて  
起外とめくこめゆるは又あさむの忘るにうて病も  
あるこころりよめん受ゆるぬされは柳梅の柳は春て  
泣み跡一其梅と飛梅一りよと梅一うぬけ梅や  
こよせにせあつうこまそよ咲出てる一忘れす  
こよあせ一と又あるまを考るぬもと終りて  
ここの小室をよ梅梅のめよ本と梅せかより梅梅

三本三巻 卷二 三〇三  
棲といえんもむ(かりら)し情けりやと感慨するよ  
又よ海にうて鳥有とあるそのかを責む其終と  
よて東漂西泊つおよかやとあふんらるぬまあまの  
志よつりある日花氏う貨殖とそふんとせ一も何  
うの内熱の憂いと名をいすう糟糠の中一に  
日有とつり其つとぬく條虎よ遊るるとほひ  
と原志うてそそりすこやあこひ八破煉性吐納  
の術も情法虚無のせぬよこつよこそを果を求る  
一療深よむく出世るよとまらぬ隠居分母を  
あつて動静やうかう失ひて都都よ圃圃すと  
よへ一こよ區ことして筆次る百に備耕一



三つう二毛とあはれむさきととる猪半襟の浅りと  
死て百里よ来と有る勇氣とおのふと干<sup>ウ</sup>鑿りひ  
せんお月勝山の如しとつそきハ仲夏の湿度は病  
あらんあはれは身自來は時を操へす中もあり海を  
愛すれはあはれ原塚と惜すしとあはれ我志は  
痛よせまりてあはれづおあはれ礼ととるそ痛き  
ようつりそ情情さしひや一替くとして難おと  
いとくまして梅山家家は侯するのりおのひ終ら  
かくてあおのつら多病喪ふの徒となりぬへは  
毒よ思疎れ甲あはれとて世外に用の一糸人  
よる柳の枝乃ち若よとまは弱く強を割せる老子

の道よかあひゆるんをさしてゆる所以を知すし  
ゆるりの思きり大枝事あはれやといとあはれ  
一ゆりぬ

二 屏風紙

桃溪

昔紙は風と立ちそけおとをせんとて製し  
屏風とよりの文彩よつきておくの挿紙と巧  
めはとめてし沛代はあかん殿園よは名流の八枝折  
也一白屋よあはれ後の六枝折と引くお入はくま  
あはれ二枝折と立て神指のねと彩るん身よ八幕屏  
と走らせ風炉はよはは屏風と飾るるはよ



てち去押附とひ便さよたりてハ枕屏風と称す  
郎中よりくハ吳楚東南のあり隣り柳巷にてハ  
乾坤日夜の境と隔つ隠逸燕居の冬新母を  
ちう紙短冊此詩歌と押しる子智菴かき茶店  
より江戶大津の信世法と強さしてぞ書畫の比叡  
に屏風板あきハ強強の形は屏風岩をそ君子  
の庖厨とをさざるも強よんぬり極楽といふもそれ  
け屏風の中はゆめらん書畫の百二十幅も畫云十二  
有を名おるよ設けりり強文婚姻ハ白繪の膝  
限と圍ひ新枕ハお舟のき強と好む改ヤ人の  
笑りる悲ひ強さか紙屏風の片元なるもそり

ぬ一其をいさよ乃んてハ椽眉の芥と並て肉屏  
の暖れと求るとやされ世のことなよ屏内と高人の  
まうぬいさすとつるおりた戯きさうり子昏り  
屏風の並よして傍るとた強り屏風のまかりて  
切と合うせる足強いつまよらん知強りや  
有強の名よこ強とを強のる強と隔つるむら  
屏風にかき世強りとまうハ宋儒の癖は似  
せど強の人強とせく心の屏風と秘強すへ

三 嗅、箴

交搦

視強言強のいつハ古今のいまめ強と湖東乃



菊の松をこれよあはれとつけてみるより支と出んありと  
いへばせとの花にこそと花ははれして唇をきくとハ  
のみひりり凡の股九宮敷各目るふまきく用となす  
手此陽よしてのちり足乃陰うして下のひも美え  
目のらん耳の支もおのむくり一藝也はかくひます  
唇をよあはれねと其表ざるふよりあやまらば表  
ぬへ一夏と心の約よも保あるすさといひりあめん  
いてそよ耳目に鼻の友位もおや一堂上の唇もあや  
あぞ鼻をうりい古人もゆるやうふせると夏よ花輪城  
なして礼よあはれは咲りあはれとあひらき  
世よまにそむとのましまめて香よあはれいふと

いとすし色と香よりうけりて色と思へば  
ゆい色の心ありといえん  
菊の松は花のいそをそそりあやめは香  
やかく海と海せよい表は限りては耳よりも目  
よりもぬき出さるる花成へ一又花橋のうやりや  
昔の人代神の香そと変化しるも花はあはれ  
いうでのあね秋のあまこまよいて茶葉菊のさそく  
あはれ山茶花のあてやうあるらとんすもふも夏よ  
梅りぬへ一はれとこそはは師もこの目よしてん  
そのかかとあはれもかく其鼻をよめるぬは  
たらまらたな秋の梅よ梅とらん



何るちよきと云は漢経のそとをくちありあつまる  
 小の方此はよき業をなすくたきこゝろよは何となく  
 こそものなりあるこそ又ぬよあこり何となく  
 かふをよきと云は漢経のそとをくちありあつまる  
 地獄の屏風よふん目かぐ鼻とあつして赤白の  
 遠いあきと同一役よはゆり軍中よかきこゝろ  
 役もこれの起ひあらんそ又大切のゆふあんはる  
 麻草と鼻よ何となくかぐ鼻とあつして赤白の  
 も限るまゝかゝり

諸子よ素衣なりて何りつと知れ彼時よ子と云ふも  
 よのつひのなるよりあられあるゆふ思ふもよ其かゝり

ぐさよ感てたちまら蛇と成ぬるゆめも何となく  
 必すへた白ひ也りり彼子路り子料理も夫子志をかり  
 と喚ぶまゝかゝり

伽藍ハ外玉の白ひあつても優よこそやこゝろれらと我  
 玉神の忌あふまふあるがこゝろれ神魚と云ふ

華古よ椒茶とたくとく鼻よかきこゝろあつても  
 華古をすへてあつてもこそ人くもてやすめり  
 と戒律の門研よあつてもあつてもあつてもあつても  
 あつてもこれよんかゝり

かねやまこゝろのハれ難よあつてもあつてもあつても  
 ありと云ふまゝかゝり



よもあひーち下ふびりー  
 何ん人あそや音しそくしんあーしんよあひぬ  
 のそそ多かるかくて福てまましあたるうけしと  
 神よつこくお立ゆるよ志しーのそそもかかんよ  
 おえんーて後とれそひかーしり馬のがうとくに  
 うちおとろされてしんしゆそおくまおのいよん  
 松もむとりやあまーうー海よん跡して海つさぬ  
 うもを其ゆそりよーしー今音はあーあ  
 よも似す神とかしーさしりーよおやつつあはまの  
 梅りもち又あーあて園もあちぬー  
 人のよくもうーくも思たるーはんあむこよしそあは

ころーいほもおやぬとみかそろのめれそ定あ侍子  
 かりそ秋のゆしんあひぬくあ例よあてぬすと  
 つよようあらん中のありぐいのあれあかきしんあ  
 しのーあしるあは其香けくきしんあうりしひ  
 あされさるいおーささしとむー女乃あ子かをりて  
 此うありとさけに仁の白ひとらしんあ  
 人のんれ園あそおーしれ飛鳥の山れあはりか  
 百篇乃待あそひ一斗の酒は飲れーぬるうたそ  
 舞あをんくのあ也ろーしんあをか人のんあは  
 ち秋の本れあ乃つらりしる白ひしそすれとひー  
 げよ同あの本れあ秋来のらそまるおりとあひぬ



引る舟の倍はまゝ讀して一袖あり其膝に座上人の  
 さつまいゝるが放屁の争ひもそそるる是も其音  
 の海弱とつけて其音の偏はらへさるへ  
 茶店の白ひいづくともぢりぬ夕其中はあは  
 しくらんかそりくのやまもさうらんとうや  
 そ思もろくされと別てあまもろくそあはしや  
 女のそける足踏の笛よハ船の麻糸もろくや茶屋の  
 廻具と好そてあつまるもろくより本せもろく  
 風の袖揚あいつる白ひありやあつす彼もろく  
 と此外よいまめあひーそりー  
 海風の白ひハ船のなみ指たら比そするといはあ

今の細長とらふゆめい白ひいづくもはしり船の思ひ  
 よとらひー船よあひー  
 松茸は袖の志とらふ船のあまそとらぬ  
 人あつらうたもろん  
 困ぬとらふもろ山のかそろろよよこしあぬ  
 あまろろのよ地とむすそねいんあひーそあ  
 ちーられあふもろあまろくまろくそあ  
 ちおろもろそくけのそろもろあつらぬ  
 飛石あつらふあつらへら世の塵もろあひ  
 あまの窓あちよりまろくもあぬあち  
 うほりあつらふあつらぬあちまへら

新編 巻二



おがへすやうにうへへぬ魚  
引や太平のせよ生きて文をいひくよもけ武ハ  
戸この櫃はおふまわるとまことた時代ありき  
之は武の目と結てす武の櫃とすけハ棒隠き  
白鳥とついでるさやめとてた白ひとてとて  
筆紙とて

おま下せの海神を庚申の夜一の火のそよ  
もりうはくまうて思ひ出るととや有ゆる  
は世のうのふんさるまふらとてはのにおよま  
つ足とて海はよあしとて

送味翁之<sup>コラ</sup>芳<sup>ニ</sup>序 并假名侍 桃溪

物の世よ鳴るいふおひまを花鳥此百鳴りよあり  
いつらののおそあしは茶虫の結と鳴する本枯の海よ入  
まて初静のつるよ造化万家の鳴り抱あうし人の  
世よ鳴るも昔よりなるとづ國はよ世に結せすた鳴り  
徳小鳴り空翁よ鳴り連り来よし竹あを鳴る中よ  
其鳴るよのと遠して鳴るよめ今もまらしとて昔乃  
松よかよるおのあしよちちとていふま事とて鳴るぬ  
日もあましとておれ風情の又面ふくて鳴るよまあはる  
海もあるそよとてまら鳴る物と遠して鳴るはぬ







いふもよし也とせよの海世よ若して南河に桃の花は乃  
ともの世は乃よ鳴りし人もあつたは十の籠の古人  
掃ありしやせらざり人若して江口の一割を求むりよ  
かゝる海あるを東家の丘と思ひすむせしも無下に  
笑へてこそその比より志ざりよ子般一決の能くする  
を揮毫とえよる下巻のうつゝと生はゆゑの  
任せてあかりち弁を針よせんともあらず二毛  
あまの桃と極へしとらふとめりしもの乃  
罪を去りてその細と結を細の正とせ給えやと  
吾友交極とせよ業むむやぬの妙事  
いそぐと笑せんといひしうらゝとて笑ひぬのこゝろなり

志げくして村の内を日かす日とつきてあふ  
目の掃あるよりの妙なるよりの縁故ありは方よ  
婚姻のこゝろおとらるうへ又念山の家を渡り  
さふおつとひしてかたつらんかゝるれくはせん陰の笑つぎ  
をやひりある精を及ませし知事よたり  
はる東武乃志を強りてお卯お末よりさ月の  
をりけてよあふはとのそ達をもつけは友舎れ  
崎ぬも箱あつらんよあやうとあつちめを始めて  
僮僕稚子の門よおて運へんも海よくま  
風る牛も及んたといはへるのけ路の旅も  
何し守部より初め乃れあつちめは范野李渡り



苦勞をいひてと笑ふの便まつけて是れ  
をいふ者ありて有るは乃具と候せん  
一面存のこころやはるち存は秋矣せん  
中月余れ日移り成ぬと候むこころおかし  
思ひあへすを候こころ一社のこころを此むの  
丁の志こころをいふこころをいふは終り  
なるこころをいふは杖笠乃臨用こころ  
おこすまひを候の報るを候せやあ  
はるこころをいふは柳塘子株  
ありては乃具と候せん  
子孫と候めとみよと候とて候

都のまをすすていふとや  
いりちあるまの候ありらじ  
こころ武蔵の地をいふは  
ありうぬの井乃おを候ぬ  
あはれ流の流はありせど  
情をいふはこころをいふは  
うぬこころをいふはこころを  
いと仁ある法代ありぬ

五 武蔵の地をいふは 交梅

大味何人そ家何人そと文場は字を換し







何ういふと程さへもかへりけしきと書さるる

海へいふおさぬ 文はちいさきも

こゝろはよしめたて 石橋よりかへり

下は八幡のあそびハ 飛ぶたねのあかり

やううたての木並 ありのよきうらた

六 送桃溪子序 六味

ある人を行きとせある人へくるを春は米のまはして  
ある人も鳥のまはしてある人も人のまはして  
かくる人も秋は米よとせある人も秋は米よとせある人も秋は米よとせ

つらんまじり人の名を秋は米よとおとりのつらんやこ  
たおあーらの人へ帰あまよりむらうなる秋は米よ  
友ありまじり人の名を秋は米よとおとりのつらんやこ  
こしてあれまじり人の名を秋は米よとおとりのつらんやこ  
一まじり人の名を秋は米よとおとりのつらんやこ  
まじり人の名を秋は米よとおとりのつらんやこ  
あるまじり人の名を秋は米よとおとりのつらんやこ  
むあーらつらん世界の世を刺の「情」まじり人の名を秋は米よとおとりのつらんやこ  
有るまじり人の名を秋は米よとおとりのつらんやこ  
一まじり人の名を秋は米よとおとりのつらんやこ  
はあーらつらん世界の世を刺の「情」まじり人の名を秋は米よとおとりのつらんやこ







七 支梅子文

六味

あはつらの中よ今もて其乃とほむらひの世は  
 文といふはまてり後へのこれなるおこ代より  
 明は起りて其今よとやうに其おとれり  
 といふ文物中其ふ知すよ其子の文をけり也後と  
 学ふ少し日は其よはるきして其世教を其子出て  
 用おとこころは後を下よとて其靴を脱く  
 おゆがりや捨くともいふれも其あるもれは其其よ  
 やらして其の美と合うするも其いふれは其如後  
 其子の通思也これいふ其子の文を其し其しに

婦女子の教いと其いふりより其虚其よ不自在  
 といふ一上代は昔くゆくを其を其其を人出く  
 能其乃其句とて一と其其文よ志を一より人  
 許去其考り後よく其目と調ふ其よその其も  
 地下の昂と成て其其法近其いひこの其の其よ  
 つん其其人と其す其其こころとて一よ二十其其を  
 天は文を其て其久其よ其其の此よ其し桃其其  
 其其の友とて其其其其其し其其の其其其  
 例より其其志の其其其其其いひ其其其其其  
 其れ其同く其其其其其其其其其其其其其  
 其辱の境よ其其其其其其其其其其其其其



君子といふ一語又も此は文よも物と書けりなり此  
 お求の回夢お癒して後より一なるのよすぐを  
 けす却中をよせの中云勢の崎こよよとみ間  
 置きとれりめて流夢とくく交枕の支士文と  
 そそ寄を流こりやりかーはや交梅の文章よ百中り  
 仲をといふ梅引郎定おか井の魅あらんや子裁此  
 子云とめて初めてこれと論すへん此は何条破く  
 くる一文人と替へんやはあこれそまめめ今同  
 轍よ替へるおまへもあつうたかこもまめんや  
 あぬ今を知ぬりと後せんといふあは世よ名氣  
 といふもの名と笑ふ鳥氣の習よあつて名の

あやまつて名氣と笑ふおね人の走る歌よして其  
 足跡ハ是ともよ也也てくおは君ちの夕てあハ  
 吾このあつとつあきて代の備ハ求へるは此備や  
 祖師兼及もあま交を拂子の下よ有破す个  
 といふよ交師顔して笑ふ人ては笑とそ子んとい  
 ありハ和洋の材木といふい虚気とよおまよとりて  
 け奪下よはありお影を捨いあをばめくかん此文を  
 りて六味り屋山のふれ曜まうう海へるその梅梅よ  
 まうせて柳錦亭よとるの

八 希白二虫の備

交梅



ん憎むるのそやうに必要する物あるは對してある  
 奪一歐より蠅蚊の如く蚊も又素とせすはより  
 かくる憎むるあらんり夜は素法師なり其友は瘦  
 おのこゆりて何は支らるるとも又(ひ)あけらせよ  
 さう白ひるるあいうあすくせめんたる日も其蓮社  
 は世ひて何の虚象とてうらうらむよおまひりけす  
 かさうらより登りつるの龍あがりこれ法師やうて  
 指は嚙して押入んとすあよまうとす世に白ひるる  
 しく志りよありてつおよその縁は強れぬは師嚙  
 として嘆して白く世の中れま縁かくの如くおのれは  
 縁をこる備入ると人とはまうとせぬは憎むまもね

余り何れ今の世すう其名の自在あるよやこり  
 何そ欺くるれかむらりあつそやたとへ身と女子は流  
 すともまぬうゆりあうりのと夜は思は風乃  
 尊純よして沸湯と交て血害するは何とせよへ  
 男これよ若てまて代の百陽のまく法の中たを  
 けう之登りあを帝の火柱とそへて飛これ速める  
 りしより湯の志うゆあらん也さうもあまらんさ  
 物と背負て越るとかかきり物精とよとせらるる  
 風の好うしく奪ると同一日の物決あらんは法師勅が  
 として君子りりふあを殺すられる事とあけては  
 おとむる事とそへはあしすやあ世象不現観世を



とるは道にぞぐり在西方の白鳥とそるへて歌よ  
 三十三月と分ちぬる拍子中の音聲也なりたれり  
 其然歟よのきん其志のまり志のまふりよと歌よ  
 すはふまふ神の歌よりのひまのひまの歌  
 あうことしつと拍子にほろこみ神よして何そ登の  
 味とうそふ歌あらんそふの只と音と拍とひまの  
 初のうそとあそふのひまのひまの歌  
 男膝を垂し又いんたんとたふたふとあひひまの  
 是れいまの拍子にひまのひまの歌  
 は脚のひまのひまのひまの歌  
 男をすこの赤らぬよちあひまのひまの歌

かゝ成へてるは神の徳文よまうせて馬の尻と糸  
 一と方より鼎のこゝろあひまのひまの歌  
 鼓して笑ひぬ

九 鬼の舞

桃溪

世よらの人々を伝へておそるものぞ鬼とて  
 されば伝へて三十二おとれをいふとて鬼とて  
 あるつとて又いつとて鬼とていふもの、雨雲とて  
 其あつとてやあまらたれぬとおそるもの、海とて  
 のりもれとてがうとてあつとていふもの、今世集とて  
 青おて鬼話とて傳の字とてあつとていふもの、



さるをおりーん人かみよそ保よそく噴とつとつハ  
角力とらよのこあるとよのハに季よよよ丸保  
よそそよーとよの風情よあよハおのつり火の車よ  
別とらあそよーならんされよも虎の皮よて禪に  
定めとらかきり清誓よとよよーはあされよ形  
いせくことやうあれハんあやすよそあそあそ  
案吉うかけの鬼が谷ちあそよ麻大江の山よ  
位てつとハ鉄火とあそー教子騎よ勇をあそすれ  
ととと強よあそあよの矢先よ猪子あそよあそハ  
波多よ腕とさよーま伯母よあてたあそーあそあ  
あそしたをりよーあそー教えよとよのあよ法本

酒類と物めよまじろーいあそそよこり一巻の無鬼  
とあてよのあれ園とうかへた吉別日記よいひ  
あそーのさー物よ目らるあれやハあそいよーよはへ  
終がよそ軍場の逆後本あそよあそあそー  
鉄炮よよあそて鬼ハ外とあそすよは福の林と  
あそあそー酒の海へあそあそいよそあそあそ  
あそあそ心の鬼のあそあそあそあそ業月清ハさ  
あそあそあそすりの文人あそー韓文とこよそ  
あそあそあそまよあそあそあそあそあそあそ  
あそあそあそあそあそあそあそあそあそあそ  
あそあそあそあそあそあそあそあそあそあそ  
あそあそあそあそあそあそあそあそあそあそ



あふりあひよせて玉匣赤紙といふ物と製して  
さるがうの冠とせしとぞは浮せう第はよむそあ  
とひーう玉鬘山の冠とありーいりのかきて流使  
の二枚はあへるとりよそれとあつとそあましくゆり  
美歌の中よふ良香り句對と啼して彩柳を意若の  
ふ流もこののたまより對歌の一枚とよまひま  
さの志やうした流あてはは様たあといまむ  
志うはそあうのそ子冠と先さとして連句は交入  
て物能信のこあーとあむハ冠のや句も具ま  
あうは此能れ強よわしてそあまは志あうハ角と  
牙とのむつうた造化傳とてうまむすあひま

角は牙あつと表たその飾われハそあつハとふ  
たあむいさうの角れかてあはそ鬼中此能冠  
とおとーめて長く文化はそあまうーと保た  
あまあ

十 求二品評

六味

世は下里巴人の曲といはありつある曲よりあん  
あつ不倭跡表白鳥の曲はそあまは彩花等とあ  
竹尾の事とすりてあすあまあるりのまては曲と  
まうハあつとあ和せんといままんこれハ表あ  
まのそあつたて度旅の内綴あるはあ三人



お對して文字の飲とあすらの細綿よまほしき神よ  
おろく穿ハ光陰と惜しむ桃李の實をよ海はま  
ととつこいその悔れあらんよこころよ分陰と惜ま  
さらんやあまのあり文字の飲とハ何とめて又あま  
のむやまをさるるとあつてこれとのむく昔も物ハ  
子よさるをさとこころんこ一後致さづくおて見るふ  
殊よあす積輪よあまの良お積の光りいとこまば  
あまはうちあまをさして海はう沙布陰とあまの  
其るまをさため一あまも衆人のほくめる人飲の  
私あらんむい一あまは師り種衆の比まよあま  
張猫よ一うま一うまのまよまらうられまを

今も程なり人の海はよ称しゆる控て己と利するん  
貫きて己と利するん一控る控ハ其日の控ぬらん  
よまといよあまの古飲とめては堪とあらんまを  
こせるとあまを感あれたあまのうけたるあまを  
は衆實よよとを求めんと守りしより物もあまは  
くこいて目飲控るむのよあまのあまこ入る  
勿備よ一と抱するんハこれよ保するのまを  
りあすといは辞と能つて抱るまをせうむの

十一 既中、あ

桃溪

既中くおのりろの既中や角よらくまよまこあま



世もさへぬくの物すさよ好ひてんくのむあふとや  
 何人の酒と癖と嗜むの具よ侍儀と探り得る  
 子孫を承成し道く子孫はよ言の夕れ飯をむつ  
 能情のこまやつあると業しこねくハ風流の形姿  
 ありんあるハ本鬼の後黄も積の整しこあふり  
 かしる探ねありしこまをこ改申れ積あるか一ぬ  
 燕尾蝶羽管の尾ハ續改中の古藝あればはし  
 へくとあふハ火の口ハ中ハ兎よなつさ早あり筋あり  
 方白あれハ烏帽子とつといハ本番山ハりくありよて  
 ハ幡屋よる番とすまぬ眉底よ程く皮紙みぬく  
 吹きハ小書代と好むハ風木お對すぬますがらん

澄ちと枝五枝のまればやこりて頗馬上の肩とほめり  
 各治平のひあふへ一やくそあふ小豊代姑一ハ  
 名のすかこらのにくさげあると本紀ハ好ハおそる  
 一ヤ表熱玉取の名ハ流巻てら次郎を後面乃  
 遊子ハ人の言れつま一ヤそ巻しすま年の花  
 あふは控ま一たそ日とあらんけと改を足懸の  
 理と備一丈程の席よ席てあふまのあれた生を  
 改中氣象として何の幾あふ中もある能情の海句よ  
 何人の改中とあふ言ハおどけものいハあつそあふ  
 虚を巻れ境と一まふあふんハ改申すさ友とあ  
 よと好ゆりてさふ



十二 不成就日解

支極

世よ不成就日といふは日よして正なるを二二二  
と申んは正の口つゆのりも形もぬくそのは情も  
いとや孔子のうらまひなりし親世の松を成し  
いほはちあはれと申古の身はうへまゝにものい  
おして世の人致運とせしはうとす家なま  
らぬさはあつとらうといふ矣の毒ありとぞれ  
いもあまやありとらういふも。あまの人のれ  
あつらん其の腹よあまの毒と突ひはしめい  
とらまらまじりと化しつらんぞとらまら

はくまらんやとておまじりとせせんやことら  
するおひあつといふぞらぬくそ軍配の日た  
を用ふ利の境をぬおの方すよまておてり  
がらといふそはぬあすとのあつと成す  
あつといふぞらぬくは成就せざる日あり  
とて利ひす者よといふそ成をぬくはあつ  
あつ日と利点とて利ひはるる中一日ねあ  
者日あつといふや暦の下候も十死百死の  
日の二本たれといふははらとらぬくはあ  
あつりよあをぬくはあつてあつるはあ  
よるも捨らすはあつるの利と知しよ



月しくよあしてま世好常友誼の外よあつしよあ  
 家の吉日とほく日休日休のあつしよあす入と  
 門おはれすも赤家の丘もあすす我思女子  
 しかくい志あしゆるさりとてまの教せる口ありとて  
 あつしよあすよあつしよあつしよあす入と  
 かくいひつあく家の赤吉の丘もあつしよあす入と  
 不成就の訓よおなぐちあつしよあす入と  
 ちてあつしよあす入とあつしよあす入と

李探文選卷之二終

下



